愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第2号
2001.3
33-40p.

古代「三河型甕」考

北村和宏

愛知県下の奈良・平安時代の遺跡を発掘調査すると、旧三河国域を中心に「三河型」甕、清郷型鍋などと呼称される独特の土師器甕が数多く出土する。この小稿ではこれらの土師器甕を一連のものとして捉え直し「三河型甕」と総称し、その型式分類・編年を行なった上で、その出土遺跡の分布について整理・検討を加えた。その結果、８～９世紀代においては三河国の国境を境に排他的な分布を示し（第Ⅰ段階）、10～11世紀代になると周辺諸国へと分布域が拡大する（第Ⅱ段階）ことが知られた。そしてその時期別の分布が意味するところについて、第Ⅰ段階については三河型甕の生産・流通に“三河国”の関与を想定し、第Ⅱ段階への変移については、隣接する猿投窯などの窯業生産の動向を勘案し、10世紀初頭を機に大きく転換する新しい律令国家の地方支配方式の確立がその背景にあるのではないかと推察した。

はじめに

旧三河国域の奈良・平安時代の遺跡を発掘調査すると、内外面ナデ調整で長胴丸底の土師器甕が多く出土する。隣接する尾張あるいは遠江地域とは形状が異なることから従来、三河国域で出土するこの種の甕を一括して「三河型甕」と呼称し、周辺諸国へ広がりをみせる折戸第53号窯式期（灰釉陶器猿投窯編年）以降のものについて、独特の口縁部の形状や形態が浅手になることおよび広域に分布する点を重視し、系統的な連続性は認めつつもこれらを区別して「清郷型甕」・「清郷型鍋」・「三河型鍋」などと別呼称を付与する見解が有力になりつつある※1。しかしながら筆者はかねてから三河型甕と清郷型鍋（三河型鍋）は一連のものとして捉えた方が当地方の古代史を考える場合有効ではないかと考えており、また「三河型」と国名を冠するには多分に感覚的で漠然とした認識で、具体的に分布域を示した議論とはなっていないことに問題があった※2と考える。とくに後者については奈良時代という「国」制の確立した時期以降のものに国名を付与することはその「国」のもつ歴史性をも少なからず付与されることになりかねないためより慎重でなければならないと考えるからである。また仮に一国を単位として同一の土師器甕が使用されていたとするならば、その生産・流通への国衙機構の介入を想定し得る可能性が生じるなど、極めて興味深い問題を提起することになるであろう。

こうした点をふまえこの小稿では、これまで「三河型」甕と呼称されてきたものに「清郷型甕」・「三河型鍋」を含めて三河型甕として捉え直し、その型式変化および出土遺跡の時期別分布状態の整理・検討をおこない、国名を冠して捉えることの妥当性および土師器甕の生産・流通から見た古代三河国の手工業生産史上の画期について若干の私見を述べてみたい。

1　三河型甕の分類と編年

ここでいう三河型甕は如何なる土師器甕なのか、まず最初に明らかにしておきたい。三河型甕※3とは奈良・平安時代の三河国およびその周辺諸国で使用された長胴（球胴形のものも見られる）で丸底の体部につよく外反・外傾する口縁部がつくもので（型式変化をして最終的には断面三角形状の厚手の口縁部になる）、内外面を丁寧なナデ（板ナデ）調整し、いわゆる「ハケ目調整痕」がない平滑に仕上げられた器面の丸底の土師器甕で、具体的には以下に述べるＡ～Ｊ類の総称として用いる。いわゆる「清郷型甕」・「清郷型鍋」・「三河型鍋」と称される一群も含めて考えることとする。この「三河型甕」の分類・編年については、かつて筆者も大雑把であるが私見を発表したことがある。ただその際には、遺跡の調査報告書ということもあって分布域を取り上げ詳細に検討するに至らなかったのでその時には「甕３」という呼称を用い、型式変化の方向について示した。そしてそこでは、「この「清郷型」甕といった場合、必ずしもその型式（形式？）設定が明

※１紙幅の都合で研究史については割愛させていただくが、先行研究として以下がある。岩野1967・1974、野末1988、佐野1990・1996、北村1991、城ケ谷1991・1996・1997、松井1992・1993、永井1995・1996、内堀・井川1996、後藤1997
※２地域を異にするが、近畿地方の土師器甕を総括した小森俊寛が方法論的問題として指摘するところである。（小森1996）。
※３この三河型甕なる呼称について、誰が提唱しはじめたのか定かでない。筆者の身辺では大淵遺跡の調査の頃、ここでいう三河型甕が出土し、1990年頃には三河地方の遺跡で多くみられるという意で、誰彼なくいわゆる「三河型」とか「三河系の甕」とか呼んでいたように記憶している。また管見のかぎりでは、城ヶ谷和広が「識別可能であり、「三河型」と呼んでもよいかも知れない」（城ケ谷1991）されたのが文献上の嚆矢かと思われる。

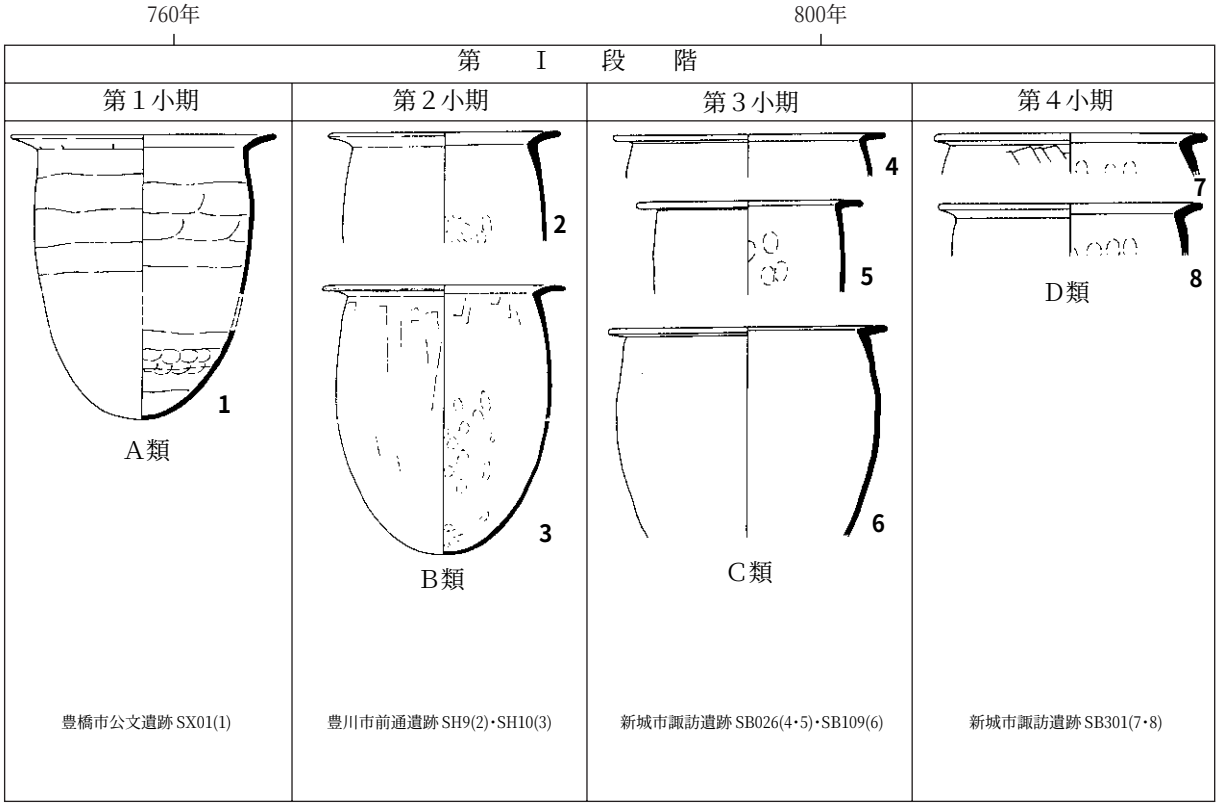

図１－１　「三河型甕」分類および編年図（１：４）

確ではない。（中略）　ここで「清郷型」甕という呼称を敢えて取りあげなかったのは、甕３の発達形態として捉え得る公算が大との私見に基づく。」（北村1991）として所謂「清郷型甕」を「甕３」に含めて捉える見解を提示した。基本的な考え方に大きな変更はないが、ただ特定の時代にのみ生産・流通した土師器甕の一形式の分類名に制定以後長期間にわたり行政単位であり続けた国名を冠することについては命名法上の問題が残る（加納1993）が、後述の出土遺跡の分布状況から、この甕が奈良・平安時代において三河国域で一般的用いられていたことが知られる故に便宜的措置として敢えて国名を冠することとした。また「甕」と「鍋」という用語の問題については、様々な議論があることは承知しているが※1、筆者自身に定見はなく、いたずらに混乱することを避けるためここでは立ち入った議論をさけ、ここではひとまず不問とし、慣用的に「甕」という用語で統一した。

（１）分類

三河型甕を、主として、口縁部の形状の相違に基づいて、以下のＡ～Ｊ類に分類する。いわゆる「清郷型鍋」・「三河型鍋」は（Ｅ・）Ｆ～Ｊ類に相当する。この三河型甕は、口径からみて大雑把ではあるが大中小の三つの規格の存在が予想される。ここでは中型品を対象とした分類を示した。中型品と小型品では造形技法上の制約から幾分口縁部の形状が異なる（相似形にならない）可能性があることを想定したためである。また全体の形態に基づく分類を行なわなかったのは、全形を伺い知る資料が極端に少ないためである。数少ない資料によれば、Ａ～Ｅ類については、多くが長胴で丸底の体部であるが、半球形で丸底のものも認められる。これに対してＦ類～Ｊ類は、長胴丸底であるが、Ａ～Ｅ類に比べ浅手（半球）のものが多い、といった特徴を指摘し得る。なお分類にあたっては永井宏幸氏の「清郷型鍋」に関する分類案（永井1996）を一部参照した。

Ａ類　口縁部は外反ぎみに大きく開き、端部は丸くおさめられている。器壁は概して薄い。

Ｂ類　Ａ類に較べ口縁部は短く、外反ぎみではあるが水平方向に開くものとなっている。なかには外反の度が強く端部が下方を向くものもみられる。

Ｃ類　口縁部はより短く、水平方向に直線的に開く傾向の強いものとなっている。ただしＢ類と区別し難いものも多々見られる。

Ｄ類　口縁部はより短く厚手で、斜め上方へ直線的に

※１例えば城ケ谷和広１９９１、永井宏幸１９９５、後藤健一１９９７など。

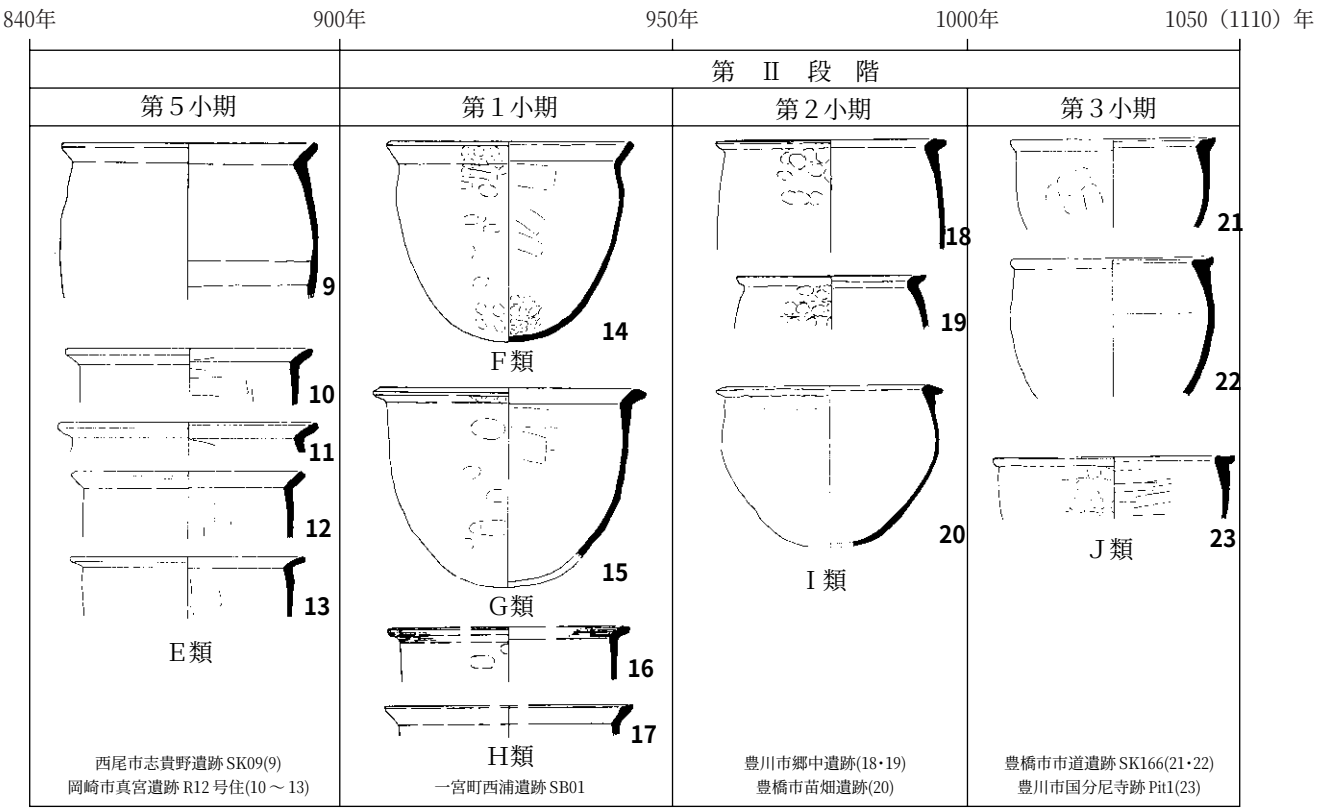

図１－２ 「三河型甕」分類および編年図（１：４）

開くものとなっている。端部はまだ丸い。

Ｅ類　口縁部はＤ類のものに類似するが、より上方向に直線的に開く（外傾）傾向にあって、口縁端面が面をもつ点で異なる。

Ｆ類　口縁部が前代同様に外傾するものであるが、頸部の締まりが弱くなる傾向にあるもの。口縁部が幾分内湾ぎみになるものがある。

Ｇ類　外傾する口縁端部が肥厚し端面が幅広のもの。

Ｈ類　Ｇ類の口縁端面の上端を水平にナデて平坦面をつくるもの（Ｈａ類）。ナデが強く口縁端面が上方に向いた形状をなすもの（Ｈｂ類）も含める。

Ｉ類　外傾する短い口縁部は分厚く、上方を向く端面は強いナデにより凹み外端は尖り断面三角形状を呈する。結果的には前代のＨａ類・Ｈｂ類の発達形態とみられる。

Ｊ類　胴部上半から口縁部にかけて体部が分厚くなり、その体部上端外面を断面直角三角形状の縁帯が巡る形状をなす。口縁上端面はナデにより浅く凹むものと、十分なナデが施されず幾分丸みをもつものがある。また口縁部の縁帯と体部との区別が不分明のものもみられる。

以上のように分類するが、個々の個体を見た場合、明確に分類し得ない甕（帰属を決めかねるもの）も多く見られる。このことは甕が連続的に型式変化したことのあらわれと解される。

（２）型式変化

次に、これら三河型甕Ａ～Ｊ類について、その先後関係について型式学的検討を加えてみたい。まずこれらを近似した形状なものを近くに配置するという原則で並べると、ひとまず

Ａ類　Ｂ類　Ｃ類　Ｄ類　Ｅ類　Ｆ類　Ｇ類　Ｈ類　Ｉ類　Ｊ類

という具合に整理できる。これより型式変化の方向について、理論的にはＡ類⇒Ｊ類もしくはＪ類⇒Ａ類の２つが考えられる。そこで次に共伴遺物（須恵器・灰釉陶器）の型式を比較すると、以下のように整理できる。なお共伴遺物の型式は猿投窯あるいは湖西窯の編年研究（斉藤1994・後藤1997）に依拠し筆者の理解する範囲で示した。

Ａ類　鳴海32号窯式期・湖西Ⅳ期第３小期～Ⅴ期第１小期
公文遺跡（豊橋市牟呂町）ＳＸ01出土品

Ｂ類　折戸10号窯式期・湖西Ⅴ期第３～４小期
前通遺跡（豊川市上野町）ＳＨ09出土品

Ｃ類　折戸10号窯式期（新）～井ケ谷78号窯式期・湖西Ⅴ期第４小～Ⅵ期
諏訪遺跡（新城市豊栄町）ＳＢ109出土品

Ｄ類　黒笹14号窯式期
諏訪遺跡（新城市豊栄町）ＳＢ301出土品

Ｅ類　黒笹90号窯式期
市道遺跡（豊橋市牟呂町）ＳＫ278出土品

Ｆ類・Ｇ類・Ｈ類　折戸53号窯式期
西浦遺跡（宝飯郡一宮町）ＳＢ01出土品

Ｉ類　東山72号窯式期

郷中遺跡（豊川市三谷原町）ＳＫ26出土品

Ｊ類　百代寺窯式期

市道遺跡（豊橋市牟呂町）ＳＫ166出土品

これより、三河型甕は、基本的にはＡ類⇒Ｈ類の順に型式変化したとみることに妥当性を見い出したい。ただＦ類・Ｇ類・Ｈ類については、例数が少ないが、一括遺物として出土することがあること（たとえば西浦遺跡ＳＢ０１出土品）を勘案すると、型式学的には先後関係として理解できるが、事実上同時期に存在した公算が大である。またＥ～Ｊ類がいわゆる「清郷型甕」、「清郷型鍋」、「三河型鍋」と呼ばれるものに概ね相当するが、少なくとも口縁部の形態を見る限りでは、型式上は連続しているものと解され、あえて別ものとして区別する程の型式上のヒアタスをは認められない。もっともＦ類以降長胴は浅手の傾向が顕著になるが継続的変化であり、別器種とするまでもないと考える。「清郷型鍋」等として区別しなかった理由である。

なおこうした型式変化の方向を容認した場合、しばしば指摘されることではあるが、口縁部を短く折り曲げたり、口縁部を厚くつくるといった型式変化は、容器として最も破損しやすい口縁部を丈夫にする工夫であり、可搬性を高めるための工夫として捉え得る可能性がある。

（３）編年

後述の出土遺跡の分布状況をふまえ、現時点では、三河型甕の編年については、大きく二段階・８小期に時期区分して理解するのがよいと考える。なお第Ⅱ段階が清郷型鍋・三河型鍋の時期に相当する。大きく二段階に分ける根拠は、生産・流通のあり方を反映すると考えられる出土遺跡の分布が大きく異なる点である。そして各小期の年代については共伴遺物の型式から推定されるの年代観を付与しておきたい（図１）。

編年を完結させるためには、その成立と終焉について明確にする必要があるが、三河型甕の成立過程について明確にし得ないため今後の課題としておきたい。同様に三河型甕の終末についてもＪ類の出現と相前後して土師器煮沸具は所謂伊勢型鍋に切り替わることが知られているが、その過程・要因については不明な点が多くこれまた今後の課題である。

２ 三河型甕出土遺跡の時期別分布状態の検討

（１）三河型甕出土遺跡の時期別分布

三河型甕の出土遺跡の厳密な分布域の把握を目的として作成したのが表１の三河型甕出土遺跡地名表である。そして上述の編年区分に基づいて時期別の分布動向を捉えるために作成したのが表２であり、遺跡の所在地を旧国郡別・時期別に整理し表示した。出土遺跡の検索および分類については、筆者の目にふれた埋文センター所蔵・管理の報告書に基づいた。

表・図の示すところによれば、以下の諸点を指摘し得る。

まず第一に三河型甕Ｅ類の黒笹第90号窯式期段階まで（すなわち第Ｉ段階）の三河型甕は、少数例を除けば令制下の三河国域を越えて出土遺跡は面的に分布しないこと、換言するならば国境を境に排他的な分布を示すということを指摘し得る。少数例はいずれも旧尾張国の５遺跡および遠江国の１遺跡からの出土である。これらの遺跡についてみると、前者の５遺跡ともいわゆる「濃尾型」甕が多量に出土しており、三河型甕はごく少数例である点で一致している。後者の１例については、三遠国境の丘陵上のものである。こうした分布姿態を重視し、この小稿では三河型甕なる国名を冠した分類名を用いることとした理由である。

第二点として三河型甕ＦＧＨ類の「折戸第53号窯式期」以降になると出土遺跡は、旧三河国域を越え周辺諸国に分布域の拡大がはじまり、三河型甕Ｉ類の時期（第Ⅱ段階第２小期）には西は伊勢から東は駿河国にいたる広域に分布するようになるという大きな変化が現われることが知られる。

以上のような出土遺跡の分布域の相違を重視し、三河型甕の編年に際して、変遷上の大きな段階区分として、三河型甕Ｅ類までの第Ｉ段階とそれ以後の第Ⅱ段階の二段階に分けた。そして従来、分布域の拡大した第Ⅱ段階のものを「清郷型甕」・「清郷型鍋」・「三河型鍋」などとして捉え、以前の「三河型甕」と分離して論じられることが多かった。しかしながら上述の理由で連続した型式すなわち一形式として捉える立場を採ろうと考える筆者の立場すればむしろこうした分布域が変化すること自体を重視したいと考える。そしてそこにその歴史的意義を見い出したいと考える。

（２）三河型甕の生産と流通の問題

次にこうした三河型甕の分布の時期的な変遷がどのような意義をもつかという点について次に考えてみたい。

分布域が令制下の三河国域に概ね一致するという点について

第Ｉ段階の三河型甕出土遺跡の分布域が令制下の三河国域に概ね一致するということからみて、特別な偶然性を考えないならば、甕が国域を境に排他的に流通するシステムの下に置かれていた可能性を考えるのが自然であろうと考える。そしてとくに８～９世紀という歴史的背景を勘案するならば、この土師器甕の生産・流通が国衙機構に直接的か、間接的かはともかくとして、なんらかのかたちで掌握されていた可能性があることを示唆するものと解したい。

ちなみに現西加茂郡三好町の境川右岸（尾張国側）に所在する黒笹第１号窯跡からは、濃尾型甕が出土している。この黒笹第１号窯跡が属する猿投窯黒笹地区の多くは、現在では西加茂郡に所属するが、境川以西に位置し、従来の研究では尾張国の官窯もしくはこれに準ずる窯が展開した地区とする見解が有力視されてきた。濃尾型甕が出土したことは、この境川右岸の黒笹地区、厳密にいえば黒笹第１号窯跡周辺は尾張国に所属していたことを示唆するものといえようか。また逆に平城宮出土木簡から８世紀代に三河国幡豆郡に帰属したことが明らかな篠島（現知多郡南知多町・知多郡は旧尾張国）の神明社貝塚からは三河型甕がまとまって出土している。

「折戸第53号窯式期」以降の分布域の拡散について

「折戸第53号窯式期」以降の三河型甕の分布域の拡散（第Ⅱ段階）は、生産と流通機構に大きな変化があったことを示唆するものであり、上記の考え方が容認されるならば三河国の国衙機構（とりわけ手工業関連部門）の何らかの大きな変化を反映しているとみることができよう。あわせて分布の拡散を受容した側の事情として周辺諸国に目を向けるならば、次の事象が注目される。すなわち８～９世紀代を通して濃尾平野で流通したいわゆる「濃尾型」甕は、黒笹第90号窯式までの灰釉陶器との伴出が確認できるが、折戸第53号窯式期以降の出土の確例を欠き、三河型甕（清郷型鍋）・伊勢型甕（鍋）の出土が確認されるということである。このことから濃尾平野における「濃尾型」甕の消滅と三河型甕（清郷型鍋）の普及は連動する事象であった公算が高いと見ることができよう。つまりこの時期の土師器甕生産の在り方の変化はひとり三河国に限られた問題ではなく、少なくとも尾張国においても内容の相違はともかくとして何らかの変化が想定されるのである。ただここで注意しておきたいのが、この第Ⅱ段階以降三河国においても少量ではあるが所謂「伊勢型鍋」の出土が認められることである。このことは一方的に三河型甕が周辺諸国へ流通したのではなく、三河国への別形式の甕の流通もあったことを示しており注目しておきたい。

生産地をめぐって

以上のように見てくると、出土遺跡の分布から見て、かなり特殊な状況を想定しない限り第Ⅰ段階の三河型甕は旧三河国域で生産されたとみることは、妥当な見解と考える。これに対して、第Ⅱ段階のものについては出土遺跡が広域に拡大する故にこの限りではないが、地域毎の器形の相違が明確に看取されない点からすれば引き続き三河国で生産された可能性はある。また画一的でないにしても器形が単純で規格化した製品であるとの印象を強くあたえられるために、一ケ所で集中的に生産したとの感もある。そして具体的な生産地として西三河地方の可能性を指摘した胎土分析（重鉱物）の結果はこれを支持するかのようである（鈴木1990）。ただし現状では胎土分析（重鉱物）についての方法論的問題や地域を異にする遺跡から出土した甕相互の製作技法の比較等の製作技法についての詳細な検討を経ていないなど未解決の問題も多く、生産地が複数存した可能性を含め今後の検討課題としておきたい。

須恵器・灰釉陶器生産との関連

次に土師器甕の生産と関連するものとしてこの時期の窯業（陶器）生産について取り上げてみる※1。周知のように、尾張国では、古代日本で有数の窯業地であった「猿投窯」（猿投窯山西南麓古窯跡群）が折戸第53号窯式期に至ると急速に衰退し（表３）、これと期を一にして美濃国（東濃）あるいは三河国（幸田窯・二川窯）において灰釉陶器窯が急速に発展することが明らかにされている。「折戸第53号窯式期」以降の分布域の拡散はこうした窯業の変化と連動した政治・社会情勢との関わりをもった動きとみることができるかも知れない。既述のように尾張国では、黒笹第90号窯式期までは「濃尾型」甕が展開するが、折戸第53号窯式期以降は「三河型」甕が展開するようになる、という状況がある。この10世紀前半は「猿投窯」が衰退する時期でもあり、尾張国の国衙機構なかんづく陶器の生産流通システムに何らかの変化が生じた可能性を指摘し得る。ちなみに10世紀後半はかの「尾張国郡司百姓等解文」が提出される時期である。なお城ケ谷和広氏は、土師器の生産について、「土師器の生産については、特別な構造物や大量の燃料が必要とは考えられないことから、あまり政治的な背景を考える必要がないと思われる。言い換えれば土師器生産の画期はより生活に即したものであり、須恵器生産の画期はより政治的は背景と関わったものによるということになる。」（城ケ谷1997）とされている。ただ筆者は、上述の三河型甕のように国境を境に排他的に分布域を形成する土師器甕の存在、あるいは上述の窯業生産の動向と多分に関連することが想定される点から、多分に政治的背景（生産組織のみならず流通機構をふくめた）と関わっていたと考えたい。

（３）生産と流通の画期の背景

文献史学の成果と突き合わせるために問題となるの

※１現段階では、三河型甕の焼成遺構については知られていない。窯を用いて焼成していたとするならば三河型甕の生産は窯業の一部として捉えるべきものとなるが、現状では分けて捉えておく。

が「折戸第53号窯式期」の年代比定である。この灰釉陶器の年代観については議論のあるところであるが、ここでは「10世紀前半」として捉える見解に依拠しておきたい。そして10世紀前半を転換期として三河型甕の生産・流通に大きな変化が存在したのではないかと考えたい。このことについて文献史学の成果と関連づけるならば、この10世紀前半はいわゆる延喜の治・天暦の治の時代で、この時期を境に従来の律令的支配体制の維持が困難となり律令制国家は徐々に新しい国家体制、所謂「王朝国家」に移行し、とくに地方支配の方式について、中央政府（太政官）の直接掌握から国司への大幅委任へと大きく変わったことが明らかにされている（たとえば佐藤1983）。具体的なかかわりは明らかにし得ないが、時期的一致からみて上述の三河型甕の生産と流通および窯業生産の大きな変化もこうした地方支配方式の変化に連動したものと捉え得るものと考える。かつて佐野五十三は、「清郷型甕」の出現を「広い交易圏を背景にして成立したと推定される」という見解を提示され、「東海地方における広域交易圏成立の背景として、寄進地系荘園の拡大に伴う物資の流通体系が重要な要素の一つであると思われる。」とされた（佐野1990）が、筆者は上述の地方支配方式の変更にともなう変革を重視したいと考える。いずれにしても土師器甕の生産・流通および窯業生産のあり方が10世紀初頭を境に大きく変化したことは、古代三河国および尾張国はじめとする周辺諸国の手工業生産がこの時期を境に大きく変移したことを示唆しているものと考えたい。そしてこの変化、具体的には三河型甕第Ⅱ段階の出土遺跡の分布状態はこれまでの研究で明らかなように、12世紀以降伊勢湾沿岸地方から東海道諸国にかけて分布する所謂「伊勢型鍋」の分布と複数の国へ広範に分布という点で共通しており、中世的な分布、換言すれば生産・流通への変質と看做すことができるかもしれない。もとより所謂「伊勢型鍋」は三河型甕とは系統を異にするものであり、このことについては今後の検討課題としておきたい。

おわりに

以上、極めて大雑把ではあるが、三河型甕の設定と型式学的変遷について如何に変化したかという点について私見を述べた上で出土遺跡分布の時期的変遷について整理・検討した結果、三河型甕の生産・流通が10世紀初頭以降大きく変移することを明らかにした。こうした変化が何を意味するのか必ずしも明確にし得ないが、年代的一致等から文献史学の研究により明らかにされている政治動向、具体的には律令国家の地方支配方式の転換という政策に連動した生産・流通の構造変革であった可能性があることを推定した。しかしながら雑駁で推論の域を出ない点も多く、また何故にこのように変遷したのかという視点、あるいは具体的には如何なる場面でどのように使用したのか、何を煮炊きしたのかといった使用の観点からの検討を一切加えていない。すべては今後の課題としておきたい。

謝辞

本稿を成すにあたり以下の方々に御教示いただいた。記して感謝いたします。（以下、敬称略）

加納俊介・須川勝以

引用・参考文献

岩野見司　1967　「古代・中世における手工業の発達（２）　東海　Ⅳ土師器」『日本の考古学　Ⅳ』河出書房新社
岩野見司　1974　「第３節　（７）清郷遺跡」『新編一宮市史　資料編４』一宮市
佐藤進一　1983　『日本の中世国家』（日本歴史叢書）岩波書店
三好町教委　1988　『愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
野末浩之　1988　「愛知県内における11～13世紀の煮沸形態」『愛知県陶磁資料館研究紀要　７』愛知県陶磁資料館
佐野五十三　1990　「清郷型甕の研究」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所
鈴木正貴　1990　「土器胎土重鉱物分析報告」『清洲城下町遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集）（財）愛知県埋蔵文化財センター
北村和宏　1991　「第６章　第２節　付　東三河地方における８～15世紀代の土器」『森岡遺跡・淡洲神社北遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第２２集）財団法人愛知県埋蔵文化財センター
城ケ谷和広　1991　「古代尾張の土師器～６世紀後半から11世紀の様相～」『年報　平成２年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
松井直樹　1992　「第４章　第２節　（３）土師器について」『八ッ面山北部遺跡Ⅱ　ー中原町地区ー』西尾市教育委員会
松井直樹　1993　「第４章　第２節　（２）煮炊具について～清郷型甕成立の直前～」『八ッ面山北部遺跡Ⅲ　ー蔵屋敷地区ー』西尾市教育委員会
斉藤孝正　1994　「１　東海地方の施釉陶器」『古代の土器研究３』古代の土器研究会
斉藤孝正　1995　「Ⅰ　東海西部」『須恵器集成図録　第３巻』雄山閣出版
永井宏幸　1995　「清郷型鍋再考」『年報　平成７年度』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
城ケ谷和広　1996　「総論　東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕　そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
永井宏幸　1996　「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕　そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
内堀・井川　1996　「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕　そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
佐野五十三　1996　「遠・駿・豆における古代の煮沸具」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕　そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
城ケ谷和広　1997　「第３章第５節東海地方における土器生産と流通（予察）」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編　真陽社
後藤健一　1997　「４　出土遺物」『大知波峠廃寺跡確認調査報告書』（湖西市文化財調査報告第37集）静岡県湖西市教育委員会
加納俊介　1993　「基調報告　東日本における後期弥生土器研究の現状と課題」『転機　４号』（第８回東海埋蔵文化財研究会　論考篇）
小森俊寛　1996　「総説」『古代の土器４・煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会

表１　三河型甕のおもな出土遺跡一覧表

県名	旧国名	旧郡名	遺跡名	所在地	I					II					文　献
					1	2	3	4	5	1			2	3	
					A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
三重県	伊勢国	多気郡	齋宮	三重県勢多郡明和町									○		三重県教育委員会1980
		渡会郡	隠岡	伊勢市倭町									○		伊勢市教育委員会1987
			波瀬Ｂ	渡会郡玉城町									○		三重県埋蔵文化財調査報告104
		安濃郡	上村	津市									○		津市教育委員会1972
岐阜県	美濃国	不破郡	桧	大垣市桧町字板井									○		大垣市教育委員会1997
		安八郡	曽根城	大垣市曽根町字城下									○	○	大垣市教育委員会1998
		方県郡	城之内	岐阜市堀田										○	岐阜市遺跡調査会1996
		武芸郡	彌勒寺跡	関市池尻									○		関市教育委員会1988･90
		恵那郡	阿曽田	中津川市阿木字阿曽田									○	○	中津川市教育委員会1985
愛知県	尾張国	葉栗郡	清郷	一宮市浅井町									○		一宮市史編纂室1974
			大毛沖	一宮市大字大毛							○	○	○	○	愛知県埋文センター第66集
			田所	一宮市大字田所							○		○		愛知県埋文センター第71集
		中島郡	山中	一宮市萩原町富田方									○		愛知県埋文センター第40・45集
			大平	尾西市三条									○		尾西市教育委員会1990
			尾張国府	稲沢市国府宮町							○	○	○	○	稲沢市文化財調査報告IV
			堀之内花ノ木	稲沢市堀之内町										○	愛知県埋文センター第52集
			北市場屋敷	稲沢市北市場町									○		稲沢市内遺跡発掘調査団1996
			東畑廃寺	稲沢市稲島町									○		稲沢市文化財調査報告ＸＸＸVI
			大縄	稲沢市井堀大縄町							○		○		愛知県埋文センター第74集
		春部郡	朝日西	西春日井郡清洲町大字朝日							○	○	○	○	愛知県埋文センター第28集
			土田	西春日井郡清洲町大字土田										○	愛知県埋文センター第２集
			清洲城下町	西春日井郡清洲町大字清洲			○						○	○	愛知県埋文センター第17・50集
			廻間	西春日井郡清洲町大字廻間									○		愛知県埋文センター第10集
			彌勒寺御申塚	西春日井郡西春町彌勒寺									○		南山大学大学院考古学研究室1998
		海部郡	大渕	海部郡甚目寺町大字大渕			○						○		愛知県埋文センター第18集
		愛智郡	玉ノ井	名古屋市熱田区玉の井町								○			名古屋市教育委員会1995
			富士見町	名古屋市中区上前津			○								名古屋市教育委員会1992
		山田郡	松河戸	春日井市松河戸町									○		愛知県埋文センター第48集
			白山中世	春日井市白山町									○		春日井市教育委員会1971
			上品野蟹川	瀬戸市上品野町									○		瀬戸市埋蔵文化財センター1998
			渋川	尾張旭市印場元町		○									尾張旭市教育委員会1994
		知多郡	大木之本	東海市養父町									○	○	東海市教育委員会1991
			松崎貝塚	東海市太田町				○					○		東海市教育委員会1977
			上浜田	東海市大田町									○	○	東海市教育委員会1999
	三河国	幡豆郡	神明社貝塚	知多郡南知多町大字篠島			○	○	○		○		○		南知多町教育委員会1989
			室	西尾市駒場・室町										○	愛知県埋文センター第49集
			志貴野	西尾市志貴野町	○	○	○	○	○	○					愛知県埋文センター第13集
			八ッ面山北部	西尾市八ッ面町		○	○	○	○		○			○	西尾市教育委員会1991
			矢作古川河床	西尾市小島町										○	愛知県埋文センター第13集
			清水	西尾市中畑町清水						○					愛知県埋文センター第25集
		碧海郡	研屋	高浜市			○								高浜市教育委員会1989
			神明	豊田市鴛鴨町				○							豊田市教育委員会1996
			加美	安城市小川町加美		○	○	○					○		愛知県埋文センター第８集
			桜林	安城市桜井町桜林				○							安城市教育委員会1998
			御用地	安城市柿碕町	○	○	○	○							安城市教育委員会1996
			北野廃寺	岡崎市北野町					○				○		岡崎市教育委員会1991
			小針	岡崎市小針町	○	○	○	○	○						岡崎市教育委員会1999
		額田郡	生平	岡崎市			○	○							新編岡崎市史編さん委員会1989
			中道	岡崎市丸山町字中道			○								新編岡崎市史編さん委員会1989
			真宮	岡崎市真宮町		○	○	○	○						新編岡崎市史編さん委員会1989
			ハサマ	岡崎市丸山町字ハサマ	○	○	○	○	○						岡崎市教育委員会1994
			広坪	額田郡幸田町大字桐山						○	○		○		愛知県埋文センター第61集
			東光寺					○	○						愛知県埋文センター第42集
			牧平	額田郡額田町大字牧平							○	○			額田町教育委員会1995
		加茂郡	千石	豊田市千石町４丁目		○	○	○	○						豊田市教育委員会1999
			梅坪	豊田市梅坪町		○	○	○							豊田市教育委員会1977
			高橋	豊田市高橋町			○								豊田市教育委員会1991
			万場垣内	東加茂郡旭町大字牛地					○		○				愛知県教育委員会1968
		設楽郡	馬場	新城市竹広						○	○		○		愛知県教育委員会1967
			諏訪	新城市豊栄	○	○	○	○					○		愛知県埋文センター第７集
			東平楠	新城市豊栄									○		新城市教育委員会1997
			島田陣屋	新城市野田字西郷	○				○				○		愛知県埋文センター第58集
		八名郡	西浦	宝飯郡一宮町大字金沢						○	○	○			一宮町教育委員会1987
			金山	宝飯郡一宮町大字金沢							○				一宮町教育委員会1988
		渥美郡	大海津	豊橋市牟呂町	○	○	○						○		豊橋市埋文調査報告第37集
			若宮	豊橋市牟呂町						○	○				豊橋市埋文調査報告第38集
			作神	豊橋市牟呂町		○									豊橋市埋文調査報告第41集
			公文	豊橋市牟呂町		○	○	○	○				○		豊橋市埋文調査報告第33集
			市道	豊橋市牟呂町	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	豊橋市埋文調査報告第20集
			桜	豊橋市西高師町							○?				豊橋市埋文調査報告第10集
			吉田城跡	豊橋市今橋町			○	○	○		○			○	豊橋市埋文調査報告第50集
			苗畑５号窯	豊橋市大岩町					○	○					豊橋市埋文調査報告第52集
			苗畑	豊橋市大岩町									○		伊藤憲1979
			別所	豊橋市石巻本町字別所											豊橋市埋文調査報告第35集
			波入江	豊橋市老津町２５									○	○	豊橋市埋文調査報告第22集
			伊川津	渥美郡渥美町大字伊川津		○									渥美町教育委員会1995
		宝飯郡	山ノ入	豊川市国府町山ノ入									○		豊川市教育委員会1985
			郷中	豊川市三谷原町							○	○	○		豊川市教育委員会1989
			麻生田大橋	豊川市麻生田町大橋		○	○		○				○		豊川市教育委員会1993ほか
			牧野城	豊川市牧野町									○		豊川市教育委員会1994
			赤塚山	豊川市市田町		○	○		○		○	○			豊川市教育委員会1994
			三河国分寺跡	豊川市八幡町	○		○	○	○						豊川市教育委員会1989
			三河国分尼寺跡	豊川市八幡町			○		○				○	○	豊川市教育委員会1991
			前通	豊川市上野町		○									豊川市教育委員会1991
			三河国府跡	豊川市白鳥町				○							豊川市教育委員会1995
			下六光寺	豊川市八幡町				○							豊川市教育委員会1997
			葉善寺	豊川市久保町葉善寺				○							豊川市教育委員会1995
			門前	蒲郡市清田町									○	○	蒲郡市教育委員会1980
			石堂野	宝飯郡御津町豊沢		○	○								愛知県埋文センター第１集
			欠山	宝飯郡小坂井町		○									小坂井町教育委員会1991・1994
			黒谷Ｂ	宝飯郡一宮町大字足山田							○		○	○	一宮町教育委員会1995
静岡県	遠江国	敷智郡	大知波峠廃寺	静岡県湖西市大知波			○			○	○	○	○	○	湖西市教育委員会1997
		浜名郡	城ノ前	静岡県浜名郡新居町中之郷										○	新居町教育委員会1989
			八反田	浜名郡新居町									○	○	新居町教育委員会1989
		引佐郡	祝田	引佐郡細江町中川									○		静岡県埋文研報告第51集
		山名郡	川田・藤蔵渕	袋井市							○	○?			静岡県埋文研報告第82集
			権現山	磐田郡浅羽町										○	浅羽町教育委員会1987
			鎌田・鍬影	磐田市鎌田								○			磐田市教育委員会1987
		佐野郡	梅橋北	掛川市徳泉								○			（財）静岡県埋文研究所1988
		城飼郡	森前外屋敷	小笠郡菊川町中内田									○		菊川町教育委員会1987
			林光寺	小笠郡菊川町土橋								○	○		菊川町教育委員会1999

表１　三河型甕のおもな出土遺跡一覧表

県名	旧国名	旧郡名	遺跡名	所在地	I					II					文　献
					1	2	3	4	5	1			2	3	
					A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
	駿河国	志太郡	居倉	島田市野田							○				島田市教育委員会1987
			志太郡衙跡	藤枝市南駿河台									○		藤枝市教育委員会1981
		有度郡	内荒	静岡市川合新田							○				静岡県埋文研報告第16集
			宮下	静岡市川合							○	○			静岡県埋文研報告第31集
			川合	静岡市南沼上									○		静岡県埋文研報告第33集
			小鹿杉本堀合坪	静岡市小鹿							○				静岡県埋文研報告第70集
			能島	清水市能島									○		（財）静岡県埋文研究所1989
		庵原郡	浅間林	庵原郡富士川町北松野								○			富士川町教育委員会1981
			廬崎	清水市横砂									○		清水市郷土研究会1981
			飯田	清水市天王町									○		清水市教育委員会1982・1984
		駿河郡	長井崎	沼津市重須									○		沼津市教育委員会1980
			永原追分	御殿場市荻原						○？					御殿場市教育委員会1977

※　紙幅の都合で文献については、最小限の表記にとどめた。御容赦願いたい。以下、文献名の略称を示す。
愛知県埋文センター：愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　　豊橋市埋文調査報告：豊橋市埋蔵文化財調査報告書
静岡県埋文研報告：静岡県埋蔵文化財調査研究所報告　　（財）静岡県埋文研究所：（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

表２　三河型甕出土遺跡の旧国郡別・時期別分布

旧国名	旧郡名	I					II		
		1	2	3	4	5	1	2	3
伊勢	桑名								
	員弁								
	朝明								
	三重								
	鈴鹿								
	河曲								
	庵芸								
	安濃							■	
	壱志								
	飯高								
	飯野								
	多気							■	
	渡会							■	
美濃	多芸								
	石津								
	安八							■	■
	山県								
	不破							■	
	池田								
	大野								
	本巣								
	席田								
	方県								■
	厚見								
	各務								
	武儀							■	
	郡上								
	賀茂								
	可児								
	土岐								
	恵那							■	■
尾張	愛智			■			■		
	知多				■			■	■
	春部			■			■	■	■
	山田		■					■	
	丹羽								
	葉栗						■	■	■
	中島								■
	海部			■				■	
三河	碧海	■	■	■	■	■		■	
	額田		■	■	■	■	■		
	賀茂		■	■	■	■			
	幡豆	■	■	■	■	■	■	■	■
	宝飯	■	■	■	■	■	■	■	■
	設楽・八名	■	■	■	■	■	■	■	
	渥美	■	■	■	■	■	■	■	■
遠江	長上								
	長下								
	浜名							■	■
	敷智					■	■	■	■
	引佐							■	
	麁玉								
	磐田								
	山名						■		■
	周智								
	山香								
	佐野						■		
	城飼						■	■	
	榛原								
駿河	志太						■	■	
	益頭								
	有度						■	■	
	安倍								
	庵原						■	■	
	富士								
	駿河							■	

表３　猿投窯の時期別･地域別古窯跡数

期	小期＼地区	東山	岩崎	鳴海		折戸	黒笹	井ケ谷	瀬戸	計
				鳴海	有松					
I	1（　＋　）									
	2（東山－111）	1								1
	3（東山－48）	1								1
	4（城山－２）									
	5（東山－11）	1								1
	小　計	3								3
II	1（東山－61）	9								9
	2（　＋　）	1								1
	3（東山－44）	6								6
	小　計	16								16
III	1（東山－50）	8	3							11
	2（岩崎－17）	19	11	2						32
	3（岩崎－41）									
	4（高蔵寺－２）	10	8	9		3	4	1		35
	小　計	37	22	11		3	4	1		78
	I　～　III	20	3	1						24
IV	1（岩崎－25）		1				1			2
	2（鳴海－32）			5		1	5	2		13
	3（折戸－10前半）		3	5	1	2	3			14
	（　〃　後半）		1	8	1	9	18	4		41
	4（井ケ谷－78）		2	5		2	5	1		15
	不　明	2	18	32	1	18	18	23		112
	小　計	2	25	55	3	32	50	30		197
V	1（黒笹－14）		14	12		16	20	7		69
	2（黒笹－90）	2	6	12	6	4	24	9		63
	小　計	2	20	24	6	20	44	16		132
VI	1（折戸－53）	10		4	5	2	3	4	1	29
	2（東山－72）	1							5	6
	3（百代寺）	1							7	8
	小　計	12		4	5	2	3	4	13	43
	V　～　VI	1		2				3		6
	計	93	70	97	14	57	101	54	13	499